

## 秋山卓爾先生の業績

—本学草創期より薬専時代まで—

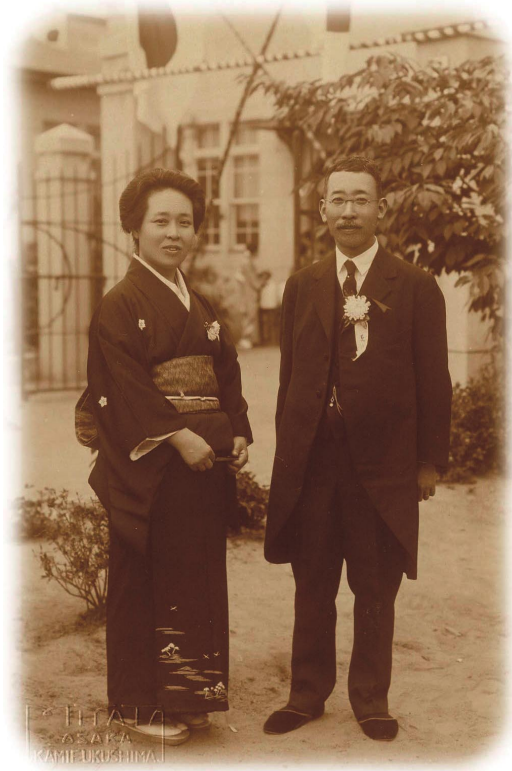
**Achievements of Professor Takuji Akiyama**

—From Pioneer Days until Professional School Days—



秋山卓爾先生

元大阪薬科大学教授 森下利明



秋山卓爾先生と奥様エツ様（大正 14 年 5 月 9 日：守口校舎校門前で日本最初の  
専門学校昇格と創立 20 周年を兼ねての祝賀会の記念写真；お孫様のお一人であ  
る石田恵子様（京都市伏見区）所蔵アルバムより転写させていただきました。）



秋山卓爾先生のご親族様本学ご訪問の記念写真（平成 17 年 7 月 30 日；前列左から 5 人目は，御直系  
のお孫様である秋山寿一様；前列右より二人目が筆者）。

## 秋山卓爾先生および本学関連年譜 (1873年～1924年)

年号	秋山先生関連事項	本学関連事項
1873 明治 6	大和郡山 柳沢藩 士族の家に生まれる。	
1892 明治 25	郡山尋常中学校 卒。	
1895 明治 28	大阪共立薬学校 (後の大阪薬学校) 卒。 内務省に入る。	
1898 明治 31	大阪衛生試験所勤務, 大阪府より薬品監視員を委嘱。	
1904 明治 37	大阪道修薬学校設立当初より, 平山松治校主と協力。 校務, 教務を担当しながら物理学・化学・分析学を教う。	大阪道修薬学校設立認可 (5.9). 男子夜間課程 本科2年 大阪市東区道修町3丁目13番地
1906 明治 38		女子部を設置 (昼間課程)。
1907 明治 40	内務省退官。 兵庫県立神戸病院薬局長 (41年まで)。	
1908 明治 41	神戸薬学校で教鞭 (43年まで)。 この頃 大阪道修薬学校「校友会」を結成 (会頭一平山)。 幹事長および「交友会誌」(編集長一秋山)。会誌は年1回発行。 生徒数が増加するに従い, 校舎移転など校務多忙になったと思われる。	大阪市東区南久太郎町1丁目17番地に 移転。
1919 大正 8		大阪市東区東高津北之町91番地 伝光寺 に移転。
1920 大正 9	阿部野校舎の賃借人は秋山卓爾の個人名義。 大阪府知事より10万円の寄付募集許可 (11.26)。	大阪市東成郡天王寺村大字阿部野145番地 の4に移転。 女子薬学部発足 (4月)。
1921 大正 10	設立者変更の許可を受け, 校主となる (8月)。 在校生の父兄や一部の卒業生を, 川崎町の自宅に招き懇談。 男子部を廃し, 女子のみの薬学専門学校への昇格をめざす という基本方針を固める。 学校経営に関しては, 校主が中心となり, 野崎仙太郎・別 所熊太郎・神山甚吉・佐藤敏雄・井宮友吉の6氏による合 議制。	平山校主, 大阪道修薬学校の廃校を宣す (7 月)。 大阪道修薬学校 男子部廃止 (9月)。 男子薬学部発足 (1回のみ) (10月)。
1922 大正 11	大正13にかけて, 女子薬学専門学校設立の準備のため多忙 を極む。 新校地の獲得, 新しい校舎建設, 財団設立の基金づくり等, ご夫妻協力のもと, 寄付金集めに専念。 八馬圭一氏が音楽会を開いて協力	薬剤師試験規則改正 (中学校・高等女学校 卒業以上のもの)。
1923 大正 12	道修女子薬学専門学校設立趣意書。 設立発起人は, 9名の連署になっているが, 校主秋山の起 草にかかるものと思われる。 守口町土居309番地134坪を個人名義で買得 (但し買価 2680円は10年年賦返済とある)。	守口町大字土居の素封家 山内竹三郎氏・ 山本宗一郎氏の援助を受ける。 文部省より設立認可についての具体的指 示。 「基本金」が最重要。
1924 大正 13	基本財産10万円の預金証明書を手にする。	大阪府北河内郡守口町大字土居397番地 に校舎新築, 移転 (9月)。

## 秋山卓爾先生および本学関連年譜（続き）（1925年～1955年）

年号	秋山先生関連事項	本学関連事項
1925 大正 14	財団法人となるに従い、理事会を構成。 理事長 野崎仙太郎 理事 秋山卓爾・別所熊太郎・佐藤敏雄 監事 神山甚吉・井宮友吉 専門学校昇格および創立20周年記念祝典において、出身者（生徒）が発起人となって、恩師である秋山先生夫妻を表彰する（5月9日）。 学校にとっての次の課題は、薬剤師法による指定を受けることであり、理事会、教員、生徒とも全校を挙げてそれに向かって努力。	財団法人 道修女子薬学専門学校 設立認可。 日本最初の女子薬専（1月）。 財団法人 帝国女子薬学専門学校と改称（10月）。
1926 大正 15		修学年限を4年に延長。
1927 昭和 2		薬剤師法第2条第2項の指定を受ける。
1928 昭和 3	指定を記念して理事者は大々的な祝賀式典を挙行（5.26）。 *大正13年以来の守口校舎建設については、専ら土地の建築業者、八代智蔵氏に依頼してきたが、この頃より建築資金、学校運営をめぐって両者の間に軋轢が絶えず、理事者の苦慮するところとなったが、遂に訴訟問題となる（昭6～昭14）。 *生徒数が増え、2000余坪の校地では狭きに過ぎたこと、それに前者の問題からも逃れるべく、新校地を求めたと思われる。	
1930 昭和 5	鉄筋校舎新築につき多額の資金が必要となる。 大阪府南河内郡北八下村大字河合に約1万坪の土地を買収。	
1931 昭和 6	在校生の父兄を訪問して寄付金を集める（先生の父兄宛礼状による）。 8月 高松－善通寺－丸亀－西条－今治－松山－別府－大分－熊本－大牟田－久留米－門司－山口 2週間に亘る募金旅行。	
1932 昭和 7		新校舎に移転。（10月） 校舎新築落成式を挙行。（11月） 陸軍特別大演習 野外統監部となる
1933 昭和 8		寄宿舎・同窓会館竣工。
1939 昭和 14	秋山先生死去（2.10）。 2月18日、大阪市阿倍野斎場で校葬を営む（キリスト教式）。 理事会は先生の生前の労に報いるため、遺族に金1万円を贈与する決議を行う「贈与契約公正証書」によれば、年1千円を昭和15年より満10ケ年間、半年ごとに贈るとある。	
1940 昭和 15	大阪・天満基督教会において追悼会。 菩提寺（大和郡山市・光伝寺）は一時先生の納骨を拒むが、後年容認する。	
1947 昭和 22		野崎仙太郎 校長退任。
1948 昭和 23		京都大学教授 石黒武雄 校長事務取扱。
1949 昭和 24		帝国薬学専門学校と改称。
1950 昭和 25		学校法人 大阪薬科大学 設立認可。
1955 昭和 30	エツ様死去（10.19）。	

## はじめに

### 大阪薬科大学資料室運営委員会

平成 16 年 10 月 9 日、本学創立百周年記念式典がリーガロイヤルホテル大阪で挙行された際、多くの大学関係者は本学第一の功労者である秋山卓爾先生に思いを馳せたものの、ご家族様をご招待できないことを残念に思ったものでした。

秋山卓爾先生は、初代校主の平山松治先生と共に本学の起源となる大阪道修薬学校を明治 37 年に設立されました。その後、経営難で廃校に直面した大正 10 年、敢然と平山校主の後を受け継ぎ校主となり、未曾有の困難に対処し、ついに大正 14 年日本初の女子薬専である帝国女子薬学専門学校の設立を果たされました。秋山先生は、債務関係書類すべてに署名し、運営資金を自ら提供し、昭和 14 年 66 歳で逝去されるまで、35 年の永きにわたって献身的尽力により今日の大阪薬科大学の基礎を築き上げられました。しかし、このような前人未踏の功績も、戦後の混乱の中いつしか人々の記憶から薄れ、またご家族様の消息も不明となっていました。しかし、幸い本学元教授森下利明先生は、本学の歴史資料を丹念に検証再確認され秋山先生の功績を明らかにされました。それは『大阪薬科大学八十年史』に纏められています。

創立百周年記念式典のほぼ 10 日後、高槻市在住の<sup>みつひさ</sup>小野允久様が秋山先生のお孫様であることが偶然に判明し、資料室運営委員会では、秋山卓爾先生のご家族様を本学に御招待することを委員会の最初の活動といたしました。実施の準備には秋山家のご親族の取りまとめ役として小野様に熱心に御協力していただきました。

かくして平成 17 年 7 月 30 日、暑い盛りの午後に、秋山先生の直系のお孫様、秋山寿一様（埼玉県狭山市）をはじめとする 11 家族 15 名の方に全国からお越しいただくこととなりました。当日は、3 時から大会議室で本学関係者 30 名ほどが参加し記念行事を開催いたしました。最初に本学よりご挨拶、続いて秋山寿一様から秋山家を代表してご挨拶をいただき、秋山家の方々のご紹介に移りました。その後、森下利明先生から秋山先生についてのご講演がありました。お話は秋山先生のご業績

だけでなく、やさしく高潔なお人柄のため学生にいかに慕われていたか、さらに奥様エツ様が本学のためにご尽力されたことに及ぶものでした。森下先生の慈愛のこもった語り口とあいまって、参加者はみな深い感銘を受け、一様に本学発展のための私たちの自覚を深めることができました。

そこで、資料室運営委員会では、森下先生にご講演の内容の執筆を再度お願いいたしました。この森下先生の講演録は、秋山卓爾先生のご功績を本学100年の歴史の中で顕彰するためのものであり、本学紀要の創刊号の記事として最もふさわしいものとする次第です。

講演要旨 (2005年7月30日, 秋山先生のご子孫を本学にお迎えして)

## 秋山卓爾先生の業績

—本学草創期より薬専時代まで—

森下利明

### Achievements of Professor Takuji Akiyama

—From Pioneer Days until Professional School Days—

Toshiaki MORISHITA

*Former Professor, Osaka University of Pharmaceutical Sciences,  
4-2-1, Nasahara, Takatsuki, Osaka 569-1094, Japan*

(Received October 25, 2006)

It is not too much to say that Professor Takuji Akiyama made the most remarkable contribution to the creation and development of our school. In 1904 Professor Akiyama established Osaka Doshu School of Pharmacy, the origin of Osaka University of Pharmaceutical Sciences, in cooperation with Professor Matsuji Hirayama. In 1921 the school fell into financial difficulty and came under the threat of closing down. Professor Akiyama succeeded Hirayama and became the second president. After making every effort to keep the school, in 1925 he established Teikoku Women's College of Pharmacy, the first women's college of pharmacy in Japan. With the support of his wife Etsu, Akiyama guaranteed the college's debt and bore part of the operational expenses. For 35 long years until his death in 1939 he devoted himself to consolidating the foundation of our university.

「大阪薬科大学八十年史」の中で、秋山卓爾先生の事跡を記述いたしましたのは私でありますので、先ず「八十年史」の編纂事情および執筆者を明らかにしておきたいと存じます。

本学は、創立以来その節目節目に記念式典を挙げてきましたが、正式に「年史」なるものを編纂したことがありませんでした。それゆえ創立八十周年に際しては是非「八十年史」を作ってほしい、という要望が理事会（石黒先生主導の下）から出て参りました。それを受けて、その5年前に当たる1979年（昭和54年）に「資料収集委員会」が設置されました。委員は、山口・太田・曾根・塩野・西邨、事務局から浅野・杉田の各氏であります。学外から塩野氏（帝塚山短大）が入っておられるのは、当初から塩野氏に年史全部の執筆を依頼する予定だったからではないかと思えます。

1981年、大学から正式に依頼されて、塩野氏が執筆を始められました。ところが、翌1982年に至り、序論に相当する部分を書き終え、いよいよ本学の創立にさしかかった所で、以後は資料不足のゆえに執筆できない旨を申し出られ筆を断られました。本学としては甚だ困惑されたようです。しかし「年史」編纂を中止するわけには参りませんので、その後を学内で書き継ぐべく、同年11月、新たに「八十年史編纂委員会」を発足させたわけです。委員は曾根・井上・太田・加藤・西邨・馬場・森下であります。但し、井上教授は最初からまったく関与されず、西邨氏は学外の方でもあり、一部の資料をいただいたのみで、実質残りの5名で編纂を行いました。

塩野氏が辞退された後、事務局が精力的に学内の資料探索を行い、幸いなことに道修時代から薬専守口時代の貴重な資料を幾らか発見しました。それに基づいて私たちは、なんとか筆をすすめることができたわけです。

直接執筆した責任者は、別表のとおりとなっています。

以上のごとく、本学草創期より帝国女子薬専の終焉近くまで、専ら私が担当することになりましたが、薬専時代の理事さんたちは、すべて鬼籍に入られ、直接お聞きできる方はいらっしゃいませんでした。それ故、残された資料のみが唯一の頼りでありました。せめて薬専時代の理事さんのご家族にでも、お会いしたいと希いましたがそれも叶わず、その時すでに執筆時間に迫られていましたので、手元の資料のみで事実を整理し執筆に専念することにした次第です。そのような訳で、資料のみで知る私の秋山先生像には、なにかもう一つ大切な

#### 追記

春沢さんの奥さんと、小野さんの奥さん（小野万里子さん）との出会いが縁となって、秋山先生のご子孫が明らかになった。秋山先生は、郡山尋常中学校（現・郡山高校）明治25年の卒業生。春沢さんは郡山高校の後輩。執筆の森下は、大学卒後の最初の赴任校が郡山高校。いずれも期せずして郡山で結ばれた縁のようなものを感じる。（小野万里子さんの夫・允久さんは、先生の孫）

もう一つ、森下が「八十年史」の題字を安田暎胤師（現・薬師寺管主）を通じて、今井凌雪氏にお願いしたのであるが、今井さんとの初対面の席でも同じような驚きがあった。それは今井さんのお母上（道修時代）、奥さん（薬専時代）、娘さん（大薬時代）と3代に亘って本学の卒業生であったということである。そして今井さんご自身、郡山中学校（現・郡山高校）の出身であったことを後程知るに至り、ここでも奇しき縁を感じざるをえなかった。



もの見落としがありはしないか、と危惧を抱いております。この度、奇しき縁で先生のご子孫にお会いできましたので、この点を補うようなお話を聞かせていただけるならば、大変嬉しく存じます。

以下は、「秋山卓爾先生および本学関連年譜」に従って話をすすめてゆきます。

先生は明治6年、大和郡山でお生まれになりました。柳沢藩士族の家柄です。明治25年に郡山尋常中学校を卒業後、大阪共立薬学校にお入りになり、28年に卒業。それから内務省に入って、31年から大阪衛生試験所勤務となりました。そして明治37年、平山松治氏が校主となって大阪道修薬学校を設立したとき、平山氏に請われてこれに協力し、教員として学科を担当しながら、他方では校務の責任者となりました。平山氏は当時大阪衛生試験所の所長であり、秋山先生の上司でありましたので、先生を最も良く知る立場にあり、先生の真摯な人柄、卓越した能力に期待されたものと考えられます。

この大阪道修薬学校は最初、道修町の塩野義さんの隣に設立されました。明治37年（1904年）のことです。これが本学の始まりです。最初生徒数は少

#### 大阪薬科大学八十年史 執筆者一覧

序章	一・二・三	p. 3 ~ 49	塩野芳夫
第一章	一	p. 53 ~ 54	塩野芳夫
	二・三・四・五・六・七	p. 55 ~ 108	森下利明
	八	p. 109 ~ 128	テープ起こし
第二章	一・二・三・四・五	p. 131 ~ 217	森下利明
	六	p. 218 ~ 232	加藤義春
	七	p. 233 ~ 247	森下利明
第三章	一・二・三	p. 251 ~ 310	加藤義春
	四・五	p. 310 ~ 356	森下利明
	五	p. 356 ~ 374	各教室
別録	五	p. 443 ~ 459	曾根節子
	六	p. 460 ~ 472	森下利明

なかったのですが、次第に増えるにしたがって、南久太郎町に移り、さらに東高津を経て阿部野へと、転々としておりますのは、校舎が自分のものでなく借家であったからに他なりません。校舎建築には大変な資金が必要になります。夜間の男子部のほか、昼間に女子部を設けていたとはいえ、生徒たちの納める授業料だけでそのような資金を蓄えることは、まず不可能であったといわざるを得ません。しかし、資料不足のため、この時代の学校経営の具体的な内容については、まったく不明であります。秋山先生は校務責任者として、その実務の中心に立っておられたわけですから、恐らく財政的に苦しいやりくりをしておられたに違いありません。

大阪道修薬学校の目的は二つありました。一つは、中学校に上がることなく店員として薬業界で働く若者に、薬剤師の資格を持たせてやるための予備教育であり、もう一つは、薬剤師として自立を目指す女性のために門戸を開いたことであります。後者は、最初あまり期待されていなかったようですが、生徒が次第に増え、結果的には後で述べますように、この女子薬剤師の養成という目的が、より大きな意義を持つようになった次第です。

大正10年(1921)に平山校主が道修薬学校の廃校を宣言されたのは、薬剤師法の改正(中学卒の学歴なしに薬剤師免許が得られない)によって前者の目的達成が不可能になったこと、また後者については、女子薬学専門学校が、全国にまだ一校もない状況の中での経営維持は不可能、という判断があったに

#### 追記

エツ様は、先生よりも先に入信しておられ熱心な信者であったことを、後で聞いた。エツ様は、一家の主婦として沢山の子供を育てながら、どの様にして主人に協力してゆかれたのか、資料が何一つ残っていないので分からない。ただ孫さんたちが、お母さん(先生の娘)から聞いたという「聞き伝え」が、語られているのは貴重である。この度の招待の礼状を何通かいただいているが、その中の一通を紹介すると、池川擴子さん(先生の二女順子さんの長女)は次のようにおっしゃっている。「お祖母さん(エツ様)は、小さい子供達を、家の大きな柱に紐で括って、年上のお姉さん(長女の英子さん)や私が面倒を見ている間に、薬学のために頑張っておられたのよ、と母から何度も聞かされてきました。……」と。母である女性が、男に伍して仕事をしようとおもえば、子供が怪我をしないように柱に縛りつけてもしなければ、仕事に集中できなかったであろう事は容易に想像がつく。同じような話を作家・岡本かの子さんが書いておられたのを思い出す。

相違ありません。しかし、この廃校という重大事態を、秋山先生をはじめ校長、役員さん達はどの様に受け止めていたのでしょうか。詳しい資料がありませんのではっきりしたことは言えませんが、みなさんが必ずしも平山校主と意見を同じくしていたわけではないことを窺わせます。というのは、廃校宣言をだされた前年の大正9年に、すでに大阪府知事より10万円の寄付金募集許可を貰っているのです。この事は、廃校ではなしに、資金を集めて女子の薬専設立にふみ切ってはどうかという考えをもった理事さんたちがいた事実を示す証拠ではないでしょうか。勿論、秋山先生はその中心に立っておられたはずですが、けれども意見がまとまらないので、校主が独断で廃校にふみきった、というのが真相ではないかと思うのです。

まさにこの時、勇気を奮い起こして、廃校宣言を断固否定されたのが秋山先生でありました。この困難を乗り切るのは大変なことです。ですが先生は、熟慮のすえ甘んじてこれを引き受けられたのです。平山氏の宣言の翌月、設立者変更の許可を受け、先生自ら校主になられました。かくして廃校という学校の危機はひとまず避けられたわけですが、これからどの様に改組してゆくかという大きな課題が後に残されました。先生にとって、これからの文字どおり苦労の連続であったことは申すまでもありません。

秋山先生は、校主になるとすぐに、男子部を廃して女子のみの薬学専門学校への昇格を目指すという、基本方針を明らかにされました。この大正10年から大正12～13年にかけては、本学の経営上最も苦しい時代であったことは、残された資料が如実に物語っております。先ず、土地を買い校舎を建てることから始めなければなりません。そのためには資金が必要ですが、そのほとんどを寄附に頼らなければなりません。この時期に先生の奥さまの話が、卒業生の口から語られていることは、はなはだ興味深いことです。文書資料の中に奥様（エツ様）の名が出てくることは一度もありません。それ故このような話は、文書の上からは知ることの出来ない貴重な事実だと思います。

大正10年道薬卒業の樽谷さんの発言を引用しますと、

「秋山先生の奥さんが寄附集めにこられた。いっぺんに出さんでいいから、と言われたので私は200円の奉加帳を出させてもらった。店員として、ひとつつき（一か月）の給料が15円か25円のときに、50円を一遍に出したことを覚えています、」とおっしゃっています。先生が、ではなく、先生の奥さんが、かくも熱意をもって寄附集めをしておられることに恐らくは感激して、当時としては200円という大金を寄附する気になったのではないのでしょうか。そのような卒業生が他にもたくさんいたに違いありません。私は、奥様も協力され

たんだなあ、と感心はしておりましたけれども、それ以上深く考えることはありませんでした。「八十年史」を書いておられますときに、奥様に関する資料は皆無であったからです。ところがこの度、本日の話のためにもう一度読み返しましたときに、成程と改めて納得したことがありました。それは先生が熱心なキリスト教信者であったということでもあります。先生がお亡くなりになられた折の訃報に「御遺族ノ希望ニテ基督教ニヨリ挙式可仕候」と追記されていることを、決して見落としていたわけではありません。が、先生ご夫妻の心の中で、信仰と人格がしっかりと深く結び付いていたことにまで、十分思いが及びませんでした。先生ご夫妻の堅い信仰に裏打ちされた献身のご努力に、今改めて深い感銘を覚える次第です。学校のため生徒のため、ひいては人のため世の中のためにと、「私」を犠牲にして少しも顧みられなかったお人柄が、これで漸く解けてきたような気が致します。

本日、「女子薬学専門学校」への昇格記念式典当日の先生ご夫妻の写真を見せていただきました。これは、すばらしい写真です。何と晴れ晴れとしたお姿でしょうか。お二人に喜びが満ち溢れています。これはまさに、大正14年5月9日「女子薬学専門学校昇格および創立20周年記念祝典」当日のものに相違ありません。この日先生は、卒業生から「表彰」されることになっていました。卒業生（教え子）は先生に「感謝」するのが、ごく普通の形と思いますが、この時彼等は、先生のご苦勞を目のあたりにしておりますから、感謝では物足りないと感じていたのでしょう。表彰発起人会の文章の中に「国家的にも将又我等個人的にもその功業の甚大深遠にこれあり」とあるごとく、もっと沢山の人々に対して、先生の功を知ってほしいと言う気持ちが、「表彰」という形になったのではないのでしょうか。そして、ここには「恩師秋山教授」と先生の名前しか挙がっていませんが、この写真を見ますと、奥様は紋付き姿、お二人とも胸にリボンをつけておられます。間違いなくお二人とも表彰されたのです。それが教え子たちの気持ちだったのでしょう。そしてまたご夫妻にとっても、それは誰に表彰してもらうよりも嬉しいことであつたに相違ありません。

さて、財団法人・道修女子薬学専門学校の設立が認可されたのは大正14年のことです。（同年に帝国女子薬学専門学校と改称）これは、日本で認可された最初的女子薬専であり、特筆されてよいことです。更に2年後には、薬剤師法による「指定」を受けるといふ大事業を成し遂げたわけですから。先生は、平山氏が去った後校主を引き継ぎ、今や女子薬専への昇格という目的を達成して学校の組織も一変しました。すなわち校長・理事長は野崎、理事は野崎・秋山・

別所・佐藤，監事は神山・井宮となり，この6氏がずっと薬専の役員となります。秋山先生は，自らは理事の一人にとどまり，理事長・校長は野崎氏に任されるのですが，その後の経営状況を資料で見ると，先生がやはり，学校の中心に立っておられたことに変わりがないように思います。

守口に校舎を新築するに際しては寄附金のほか，山本・山内両氏から多大の援助があったことを忘れてならないのですが，そのあと戦後に至るまで，財政的に余裕のあった時期はまず無かったといつてよいと思います。守口から松原へ，鉄筋の校舎を建てて移転致しますが，この場合も土地以外は全部借金（約35万円）でまかなわれました。秋山先生を始め野崎校長，理事さんたちは，固い結束によってこの困難を打開していったことが資料から十分に読み取ることができます。例えば，先生が夏期休暇を利用して四国，九州，中国から来ている生徒の自宅を訪問して，寄附金集めをしておられることが，後で出された礼状の原稿によって知ることができます。また，学校の運転資金が時に不足していたらしく，その都度先生はご自分の懐から捻出してそれを補っておられたことを示す借用書も一部ですが残っています。本来借用書なるものは貸し手が所持するものですから，先生はこれをどれだけ持っておられたか私たちは知る由もありませんが，先生は，返済してもらうことなど最初から毛頭お考えになっていなかったのでしょうか。

野崎先生は，明治45年以来ずっと校長を勤め，また理事長であった時期も長く，本学の功績者の一人に数えなければなりません。秋山先生とは対照的な性格であったように思うのです。それを示すお二人の墨筆の書が残っていますので紹介しておきましょう。日付けがないので分かりませんが，恐らくは松原校舎に移った昭和7年以後に書かれたものかと思います。

野崎校長 「千里之行始於足下」

「千里の行，足下に始まる」という漢文です。「どんな高遠な理想も足下の一步一步から歩み始めなければ実現できないのです。今，目前に課せられている勉強に精を出しなさい」というような意味です。

教師が胸を張って生徒に教訓を垂れている図が思い浮かびます。それは，教師として格好よく立派なことをおっしゃっているわけですが，幾らか威圧的に感ずることを免れない面もあるのではないのでしょうか。これに対して先生の書は，

秋山先生 「顔やかほ 瓜さね顔に仏頂つら  
売るか買ふかは 人のすきずき」

と、ちょっと見れば、ひょうきんともとれる和歌であります。肩肘を張った姿勢は、微塵もありません。この「顔」を「個性」に置き換えれば直ぐに解ることですが、人にはいろいろな個性があります。その個性が好きな人も嫌いな人もあってよいのです。そういういろいろな人が集まって世の中が成り立っているのです。のびのびと個性を伸ばしましょう、というくらいの意。これは何と現代に通ずる自由主義思想ではありませんか。軍国主義的価値体系の中に組み込まれていた当時の教育界の中で、思想統一に暗に抗して、このように柔軟な自由の思想を持っておられたということは、本当に驚くばかりです。野崎さんは軍人（三等薬剤官・少佐）という一面があり、表に立っていただくことが、時局から考えて好都合であったのでしょうか。

秋山先生は、日中戦争の最中、松原に移転後7年ばかり経った昭和14年、66歳でお亡くなりになりました。道薬創立当方で31歳ですから、働き盛りの35年、つまりは生涯を薬専に捧げられたと云って差支えないと思います。校葬を阿倍野斎場でキリスト教式によって執り行なわれました。全校悲しみに包まれたことは申すまでもありません。

理事会は校葬を営むと共に、その功労に報いるため、ご遺族に1万円の贈与を決めていることは、全く異例のことです。理事会としては、創立以来の先生のご苦勞に対する感謝の気持ちを、このような形で表わさずにはいられなかったのではないのでしょうか。「贈与契約公正証書」には細かい事が書いてありますが、要するに昭和15年より10年間、年に二回、500円ずつお渡しするという内容です。しかし、終戦後の恐ろしいインフレの時期に、これが果たして最後まで実行されたのかどうか、それを知る手掛かりは本学にありません。

また、卒業生が中心になって「故・秋山先生弔慰金」の発起を行うと、1,000余名の人々がこれに応じています。この事は、先生がいかに多くの人々に慕われ、また惜しまれていたかを示すものに他なりません。「帝国女子薬学専門学校」は、戦後やがて「大阪薬科大学」に引き継がれますが、薬大100年の歴史のなかで、道薬、薬専という前半のいわば苦難の時代に、これを育み発展させてきた最大の功績者は、わが秋山先生であったことを、皆さんにお伝えして今日の話を終わりたく存じます。